

他部落の同日入営の者達と団本部に集合して、団長の激励を受けて、朝三時半頃本部を出発し、雪の中を徒歩で、オオカミの襲来に備え、大声で歌をうたったり、どなったりしながら駅のある鶴岡の街まで出たが、遂にこの日が開拓団最後の日となってしまいました。敗戦で私達の前途の望みは無残にも打ち砕かれました。満州開拓者にとってはあまりにも悲しく惨めな結果となってしまった。

私達の進んだ道は良し悪しは別として当時純粋な気持ちで、国のため、海外発展のために満州で活躍した数年間の青春は、絶対に無駄ではなかった、良い教訓であったことをこれから一生の糧にしたいと思っております。

## 同胞の死を無駄にせぬために

岐阜県 三尾 宇田子

「足音が高いぞ」前方からの押しこらした声に、息

をつめて、足をすべらせて進む一群の人たち……。「月が、いやに照りやがるなあ」ぼつんと誰かが言った。

すきつ腹に耐えかねて、命と取り替えになるかもしれないと思いながらも、私は收容所の鉄条網を抜け出した。畑から、とうもろこし等を盗むためです。

拉古收容所での食糧の配給は、家畜も食べない、黒い皮つきのコウリヤンめしと、レンガのように固い黒パンが少しでした。

收容所では、老人や子ども達が、発疹チフスと、栄養失調で、バタバタと倒れ、死んでいった。餓死寸前の私達は、けだもののように食を求めて、夜活動し、昼は死んだように眠るのです。

時計は、收容所へ来るまでに、山中で匪賊の襲撃にあったり、ソ連兵に取上げられて、時間も月日も、今日は何曜日などわからない毎日です。

露の玉が月光に輝いて、虫がしきりに鳴いています。ときどき足音に驚くのか、鳴き声がとだえ見張りの満人に見つからないように、すり足で行くのですが、と

きどき、バーン、バーンと威嚇的な発砲があり、とても緊張しました。

ようやく目ざす畑にたどり着き、とうもろこしや、ねぎ・じゃがいもをリュックに手早く詰めます。「星がもうあんな所に行ったぞ、早く仕度して帰ろう……。」先着者達からの連絡が口伝えで伝わり、早くしようとおせるほど手がふるえます。

突然発狂した義勇隊員（十三、四歳の少年でしたが）が、「お母さん、おかあさん！」と大声で叫びながら、両手を挙げて、とび出していきました。たちまち見張りに見つかかり、銃殺されました。少年は、月の光の中に一度はねあがり、そしておおむけに倒れました。

あまりのことに、私は腰がぬけたようになり、動けなくなっていました。

鎌田幸三郎さんが「宇田ちゃん、しつかりせい」と、傍から押しつぶした声をかけてくれましたが、返事もできません。

大豆畑に身をひそめて見ていると、満人は殺した義勇隊員を足で蹴りながら、服を脱がせ、裸にし、靴と

衣服を持ち去って行きました。

今の中学二年か三年ぐらいの年頃であった。少年義勇隊員の死と、あの「おかあさん」と叫んだ声は、今も私の耳に残っています。

家族から遠く離れて、一人満州に渡り、お国のためと教育されて、開拓と食糧増産に、朝早くから夜おそくまでつとめた。義勇隊員の末路は本当に可哀そうでした。

九月中旬といえば、中秋の名月、月見祭りの派手に行われる満州にいて、満月を眺めるどころか、真昼のように、黒く人影を映し出す月に、「月よ雲にかくれてよ、月よ雲にかくれてよ」と念ずるだけでした。

こうして決死の思いで取ってきたものを、まわりの人びとに分け、監視の目をさけながら、粥に入れて食べたり、生きるために、生のままで、とうもろこしや、ニンジン等をかじりましたが、飢えた胃袋には美味しく、でも、こんなことは一時しのぎに過ぎません。飢えは慢性化し逃避行に入ってから、生理も止まり、髪の毛も茶色になってゆき、皆げだるそうに横になった

り、膝をかかえて、無気力な日々を送りました。

ハルピンの白梅小学校へ収容された時は、ソ連兵が女狩りにきて、トラックに女の人を乗せ、何人も連れ去りましたが、その人達は二度と私達の所へは戻ってきませんでした。

私は顔に鍋墨を塗り、髪の毛を缶詰の蓋で切り、麻袋を着て男装しました。

思い出は前に戻るが昭和二十年八月六日あの日。牡丹江市へ行った帰りのこと。私達にチャムス・宝林・方面行きの列車は動かないから、目的地へ歩いて行くように、と駅員から言われて「変だなあ」と思っていると、その時、関東軍の家族達が、どんどん南下して牡丹江のほうへ行きました。

すでにその日、ソ満国境が危険な状態だったので、関東軍の家族を、いち早く日本へ、引き揚げさせていたのですが……民間人は訳も判らずに、列車から降ろされて、南下して行った汽車とは反対に、五河林駅から七里まで二十キロメートルほどの道を北へ向かって歩いて帰ることになりました。

軍用列車が動くのに、どうして私らは歩かんらん。途中でおろして馬鹿にしとる。汽車賃は払ってあるのに……」など、怒りながら歩きました。

私は、革靴をはいていたので、かかとにママができ、つぶれて血がにじんできて、痛くてたまりません。線路の切石と枕木の上を素足になって歩きました。

あの日の開拓団員にも、避難命令が出ていたなら、多くの仲間を失うこともなかったのにと、今も私は断腸の思いがします。

坂下分村の人たちは、国境警備のソ連兵のあわただしい動きなど、知ることできなかったし、八月九日、ソ連が国境を越えて侵攻したことも知らず、その日も父は、関東軍へ供出する大豆などの荷造りをしていました。

二百五十六人、開拓団員の半分の仲間を失った悲しい体験を、二度とくり返すようなことがあってはならない。生き残った私達が戦争を知らない世代に語りつぎたいと思っています。多くの同胞の死を無駄にせぬために。